

文化地理学における文化の概念

杉 浦 直

文化地理学 (cultural geography) は、近年、人文地理学 (human geography) の 1 部門として、アメリカを中心に急速に発展したが、その定義や方法、研究対象については、今なお必ずしも明確な一致を見ていない。しかし、そこにおいて文化 (culture) の概念が重要な役割を占めていることは、異論のないところであろう。文化地理学が、文化 (または文化現象) を対象とする地理学、あるいは文化の概念の地理学への適用、であるとすれば、その方法論体系の構築は、文化の概念を明らかにし、そこにおけるその役割と有効性を明示することから始めねばならない。しかしながら、従来この問題に関して文化地理学者達の議論が十分つくされたとは言い難い。そこで、小論においては、従来の文化地理学における文化の概念規定及び文化地理学の体系におけるその位置づけと役割をめぐって若干の展望を行い、そこにおける一般的傾向と問題点を探るとともに、斯学における文化概念のあるべき姿についての 2, 3 の私見を付け加えた。

I 文化地理学における「文化」の概念規定とその位置づけ

文化地理学者達が文化の概念をどのように考え、規定してきたか、また文化地理学の体系の中でそれをどのように位置づけてきたか、という問題を詳細に検討するには、これを方法論的に扱った論考のみならず、様々な文化地理学の実証研究にも立ち入って、詳しい展望を行う必要がある。しかしなが

ら、筆者にはその準備が今のところ十分ではないので、ここではアメリカ及び日本における文化地理学のいくつかの代表的と思われる著作・テキスト及び明示的に文化の問題を議論した若干の論文に限って展望を行い、この問題の一端を考察することにする。

アメリカにおける文化地理学的研究の胎動と展開は、周知のごとくサウアー (Sauer, C.O.) のバークレイにおける教育と活動によるところが大きかった。しかしながら、サウアー自身による「文化地理学」の概説¹⁾においては、地表面を改変する人間の役割に焦点があてられ、文化地域 (culture area) のダイナミックな見方が強調されているものの、文化の内在的性質についての議論はほとんどなく、従って文化地理学と人文地理学の他の部門または人文地理学そのものとの概念的な区別がかなり曖昧になっている。その後、いわゆるバークレイ学派を中心に実質的な文化地理学的研究は進展したものの、文化地理学と人文地理学との方法論的な未分化状態は、おそらく第2次大戦後まで続き²⁾、文化の概念的考察から出発する文化地理学の性質と方法のある程度体系的な提示は、ワグナー (Wagner, P.L.) とマイクセル (Mikesell, M.W.) による『文化地理学論集』³⁾ の出版まで待たなければならなかった。従って、本稿の考察も、同書における文化概念についての議論を取り上げることから始めよう。

ワグナー等は、この論文集の序文⁴⁾において、文化地理学において取り上げるべきテーマを整理し、文化 (culture) を、文化地域 (culture area)、文化景観 (cultural landscape)、文化史 (culture history)、文化の生態 (cultural ecology)、とともに斯学の中核を為す5つのテーマの1つに位置づけ、その概念を解説している。それによると、まず文化の観念の焦点は個人やその個人的特徴ではなくて、一定の領域 (space) を占める人々の共同体、及びそうした共同体のメンバーによって共通して保持されている信念と行動の無数の特色、にあるとする。換言すれば、文化の概念は、人々を共通の特性に応じてグループに分類し、同時に地域 (areas) をそこに居住するグループの特色によって分類する手段を提供する。文化は、またシンボルを通してコミュニケーションする人々の能力の1つの結果でもある。人々は一緒に住み、働き、

語り合うが故に、同じように考え、行動する。それ故、文化はある共通の地域を占拠する人々の間にのみ生ずる。1つの文化は、それを共有する人々が移動するにつれ、またコミュニケーションの圏が新しい領域における他の文化の人々の間に普及するようになるにつれ、拡大する。

こうした文化の概念、定義は、とりたてて特色のあるものではない。彼等は、こうした考え方を、クローバー (Kroeber, A.L.), クラックホーン (Kluckhohn, C.), ホワイト (White, L.A.) 等、アメリカの代表的な文化人類学者の著作を例証して展開しており、言わば文化人類学におけるやや古典的な文化の概念を、そのまま導入した趣きが強。ただ、1つの文化の形成の基盤に特定の人類集団 (共同体) が占拠する地理的空間が在り、文化が地理的基盤に依拠することを強調している点には、地理学者としての考え方の特色が出ていると言えよう。従って、彼等のとらえる「文化」は、その依拠するところの地理的空間の変化に伴って移動、拡大する存在でもある。

このような考え方は、当然2番目のテーマである「文化地域」の概念に連動する。ここにおいて、文化地域は特定の文化によって特徴づけられた共同体のある時代の居住地域として定義される。従って、文化地域を認識し分類することは、同時に文化を認識し分類することでもある。では、文化ないし文化地域の分類は、何によってどのように為され得るのであろうか。この点に関して、ワグナー等は必ずしも明確な方法を提示していない。彼等によれば、文化の概念は柔軟性 (flexibility) と相対性 (relativity) を有し、様々に適用され得るが故に、それを担う人口集団の単一かつ正確で完全な分類のシェーマは見出し得ないという。しかし、実用的には個々の文化の特徴 (traits) の分布が重要な鍵となる。そのうち、言語は多くの場合、文化の基本的類似性を形成し、時に宗教、技術、経済のような文化の他の要素が下位の文化地域をまとめるのに役立つ、としている。

ワグナーとマイケルによる以上のような考察でもって、文化地理学における文化概念の十分かつ適切な枠組が提示されたであろうか。これに対して、我々は残念ながら否と言わざるを得ない。彼等の示し得た文化の概念は、全体の文脈から見て、ある地理的空間に居住する人々 (共同体) の経験的に実

在する生活様式の総合体であり、むしろ「文明」の概念に近いものと言える。そうした生活様式ないし文明様式の特徴を裏打ちする規範や価値体系についての言及は少なく、文化概念の最も基本となる部分⁵⁾の位置づけを明確にせず、表層的、抱括的な文化概念を提示したのみに終わっている。また、文化が一種の生活様式複合体であることを容認したとしても、その内容の認識にあたっては、言語、宗教、社会慣行、技術(技術的過程及び生産物)、さらに経済等の、異質な指標ないし要素を相互の明確な位置づけなしに取り組んでおり、概念の輪郭をはなはだ不明瞭なものにしている。

そして、おそらくより重要なことは、こうした文化の概念の文化地理学の体系の中における位置づけが不明確なことである。ワグナー等は、文化地理学を地理的諸問題への文化のアイデアの適用と規定する一方で、「文化」を文化地理学の5つのテーマの1つとして、「文化地域」、「文化景観」、「文化史」、「文化の生態」と並列的に論じている。また、文化地理学者は、文化の概念を使って人間の為したこと(man's work)のワールドワイドなパノラマを調査すると述べる一方、文化地理学者は文化と文化の要素の時間と空間における分布を研究する、としている。ここにおいては、対象としての文化と説明の枠組としての文化とが、概念的に明確に区別されないまま、文化地理学の体系に取り込まれているのである。ワグナーとマイクセルのこのリーディングスが、文化地理学の方向を定める上で大きな役割を果たしたことは否定し得ないが、その理論構築において最も基本となるべき文化の概念規定とその位置づけに関しては、内的な論理の一貫性が得られぬままに終わっているのである。それはとりもなおさず当時(1960年代)の斯学の方法論の未成熟さ、あるいは厳密な概念規定の必要性への無関心さ、を反映したものと言えよう⁶⁾。

こうしたアメリカの文化地理学の方法論の一般的状況が、1970年代に入って飛躍的に前進したとは言い難い。まず、この年代の代表的な文化地理学の業績の1つと思われるゼリンスキー(Zelinsky, W.)の『合衆国の文化地理』に目を向けてみよう⁷⁾。この書は、文化地理学の方法論の展開を目的としたものではないが、アメリカ文化の空間的展開の過程と構造を考察するに先立って、文化と文化的システムの一般的性質について論じている⁸⁾。ゼリンス

キーが、ここで主に依拠しているのは、ワグナー等と同じくクローバー、クラックホーン、ホワイト等のアメリカの文化人類学者の文化理論であるが、中でもクローバー及びクラックホーンによる文化概念の総括的展望（1952）における結論に注目している。すなわち、ゼリンスキーはまず「文化（culture）はシンボルによって習得され伝えられる、行動の、かつ行動のための、パターンから成る；文化の基本的な核心は伝統的なアイデアとそれに付随する価値から成る」というクローバー等の表現を引用し、さらにこれを受けて文化は「行動のための構造化された伝統的なセット、アイデアと活動のためのコードまたは型板 template」であり、最も終極的、基本的センスにおいて「世界についてのイメージ」であるとしている。ここにおいては、抽象的な文化概念、そして行動のための枠組としての文化の考え方を強調する人類学の新しい動向⁹⁾が導入されており、その意味ではワグナー等の抱括的実在主義的傾向から一歩前進したものと言えよう。

しかし、続いてゼリンスキーは、文化的システム（cultural system）についての議論に入り、3つの次元から成るモデルを提示している。すなわち、文化的システムは、その内在的要素とその複合体（宗教、言語、道具…）、それを担う人々のグループ（男性、女性、農民、ある宗派の人々……、これをSub-cultureと呼ぶ）、空間的次元（文化地域）、の3つの次元をもつ存在としてモデル化される。この図式において、ある文化的システムは、明らかにある地域に住む、あるカテゴリーの人々の有する、行動なり習俗の複合体を意味し、生活様式ないし文明の複合体ときわめて近い実体的な概念として理解される。

ここにおいてゼリンスキーは、抽象的な「文化」と実体的な「文化的システム」とを、一応概念的に区別しているように思われる。しかしながら、その後の論旨の展開においては、時に両者の概念的区別が不明確になる箇所がしばしば出てくる。彼が、「1つの文化（a culture）」と言う時、明らかに実体的な1つの文化的システムについて語っていると思われるケースが見られる。こうした混同が生じてくる背景には、おそらく彼が文化概念における抽象と実体との間の構造的な関係に注意を払っていなかったことがあるものと思わ

れる。文化システムの内在的構成要素の1つに、価値システムを他の異質な要素と並列的に挙げている点にも、そうした傾向の一端が現われていると言えよう。ゼリンスキーのこの書は、アメリカの文化と社会についての優れた分析の1つとして評価されるが、文化概念の考え方に関しては、後に批判される全体論的傾向（後述）とも併せて、十分に満足いくべきものとは言えない。

70年代に出された一般的な文化地理学のテキスト類に目を向けてみると、状況はさらに後退している。まず、スペンサー (Spencer, J.E.) とトーマス (Thomas, W.L.) による『入門文化地理学』(第2版)を取り上げる¹⁰⁾。筆者等は、第1章で文化地理学とは何かを概説し、その冒頭で文化 (culture) の概念の規定にかなり力を注いでいる。ここで、文化は一般的には「歴史的に学習された人間の行動と物事を為す方法の総体 (sum total)」と定義される。しかし、現実の文化は地表面の特定の領域を占拠する異なるグループの人々によってまとめられ、別々の単位において発達した。文化の単位は階層的に構成されており、最小の単位は culture trait、関連している culture traits の集まりが culture complex, culture complexes の大きな集合が「文化システム (culture system)」となる。特定の文化システムに従う人口集団が居住する領域が、「文化地域 (culture region)」である。このような図式において、「文化」は完全に経験的に実在する存在として理解される。すなわち、文化は現実に存在する人々が有する生活様式の総体であり、文化と文化システムは、同一の概念の全体と部分との関係で、とらえられている。彼等の概念規定においては、実体としての「文化」の構造化に注意が払われ、またそこに内在する具体的プロセス (発見, 発明, 進化, 伝播) を論じている点に、表層的抱括的概念からの一定の前進は認められるものの、ここにおいても、文化概念の中核となるべき価値体系や規範への考慮は、大きく後退している。そして、文化概念の根底にあるこれらの要素を軽視しているために、文化が文化システムや技術・生活のシステムと同義的なものとして、並列的に文化地理学の対象概念に組み込まれていくことになる。

ジョーダン (Jordan, T.G.) とロウントリー (Rowntree, L.) の『人間のモ

ザイク——文化地理学入門』(第2版)では、表層的抱括的な文化を考える傾向が、より明瞭に出ている¹¹⁾。著者等は、冒頭でタイラー (Tylor, E.) の古典的な文化の定義：「社会のメンバーとしての人によって獲得された知識、信念、芸術、道徳、法律、慣習、その他の能力と習俗を含む複合的全体」を引用し、それを受けて文化 (a culture) はあるグループの人々が共通して保持している生活様式の総体 (a total way of life) であると規定している。ここにおいても、思想や価値体系は言語や技術等と並列的な要素として、抱括的な文化概念の中に構造的な位置づけをもたずに扱われることになる。ジョーダン等の考えでもう1つ特徴的なことは、文化とそれを担う人々の区別が、文化地理学の体系の中で薄れていることである。彼等によれば、言語、行動、思想、生活、技術、社会等における類似性が人々を1つの「文化」にまとめる。従って、文化地理学は文化的グループ (cultural groups) における空間的多様性の研究であると述べる一方、他のところでは、文化地理学は人間の文化 (human culture) における空間的多様性の記載と説明であるとする。ここにおいては、文化も文化を担う人々のグループも、ともに文化地理学の対象概念として同一視され、その相互の概念的関係は等閑にされているのである。

ここで取り上げた著作はごく限られたものであり、またカレッジ用の教科書等を含んで、必ずしも専門的なものばかりではない。しかし、アメリカの文化地理学のごく一般的な状況・水準を知るには、むしろ好適な材料と言えよう。総じて、アメリカで展開された文化地理学における文化の概念規定は、文化人類学の古典的文化理論に頼っており、それを文化地理学自体の方法論体系の中に位置づけて新たに展開しようとする姿勢には乏しかった。さらに、タイラー的な抱括的文化概念の影響が強く残り、また文化を経験的に実在する地域住民や民族の生活様式として研究の具体的対象とみなすところが主流であったと言えよう。

次に、日本の文化地理学における状況を、ここで簡単に振り返っておこう。周知のように、日本において文化地理学は比較的研究者の数の少なかった分野に属するが、近年ようやく優れた研究が増加し、独自の地位と分野を確立しつつある。

日本において、文化地理学を人文地理学の一分科としてとらえてその内容を提示した最初の書は、おそらく昭和初期に出版された西亀の『文化地理学の諸問題』であろう¹²⁾。ここで西亀は、文化は生活の様式 (life-mode) であるとするウィスラー (Wissler, C.) を引用し、さらに文化をウィスラーの文化綱目の中から経済、政治、交通等に属さない他の部分として狭く解するとしている。その内容の中心は、従って言語、芸術、道德、宗教、慣習となり、全体の文脈からして、実在する人類文明の諸側面を指している。ここでは、これら諸側面間の関係や文化の総合性は、明示的に論じられていない。文化地理学は、こうした「文化」を対象とする地理学として規定される。なお、続いて辻村の『文化地理学』が第2次大戦中に出されている¹³⁾が、ここでは文化地理学と人文地理学とがほとんど同義語であり、文化の概念規定についてははっきりした形で議論していない。

戦後にあつて、文化地理学の内容と体系に関する議論をようやく少し本格的に展開した書としては、木内が編集した朝倉地理学講座の『文化地理学』がある¹⁴⁾。木内は、第1章で文化地理学の対象と方法を論じている¹⁵⁾が、その依拠するところは、千葉も指摘する¹⁶⁾ように、前述のワグナーとマイケルの「文化地理学論集」序説の考察であり、従って文化の概念に対する考察も彼等の議論の範囲を出ていない。ここで、木内は文化を基本的には文化地理学の対象概念としてとらえ、「文化地理学は地理学的方法による文化研究の科学」、言わば「文化の地理学」と規定する。文化は多岐な内容をもつ総合的概念であり、その諸要素として、思想、宗教、文学、芸術、心理、言語等の精神的なものと、その造形的表現（寺院、建築、庭園）や衣食住の生活様式、科学技術、経済産業等の物質的なものが挙げられている。文化地理学においては、これら各要素を総合的に考察することが要求される。一方、文化は「人間の行動として表現される内的な本性」を示し、これによって人間集団間の異同が理解される鍵となる、とも言う。以上のような考えには、実体的なものと抽象的なもの、表層的なものと深層的なものとの混在、混同があり、よく考えられた内的な論理の一貫性を示すものとは言い難い。これは、なにかんづく、ワグナー等の議論に含まれている内的矛盾が批判されないまま

引用されていることによるものと思われる。なお、この書に先立ち、別技も文化地理学の体系と内容について簡単に論じている¹⁷⁾が、ここにおいてもワグナー等の考えの紹介が主であり、文化概念については文化が複雑な総合体であると言う以上には議論していない。また、佐々木は文化地理学と境界領域の問題に関する考察の中で、ワグナー等の文化地理学の課題を、やや批判的に紹介している¹⁸⁾。しかし、文化の概念規定については、文化が一定の地域的限定性を持ち、地域に特色を与える存在であることを強調するに留まっている。

一方、佐藤はその著書『生活文化と土地柄』の中で、主として文化人類学における文化の概念を検討し、1930年代からは抽象的な文化概念が強調されており、文化的行動および文化的物件が文化そのものの一部分を為すものではない、という考え方も成立し得ることを指摘した¹⁹⁾。しかしながら、佐藤自身は、地理学において両者を区別しなければならない緊要性はないとし、文化を「文化」および文化的行動とその過程の成果・結果である文化的物件を含めて、広い意味で解するという立場をとっている。

千葉は、我が国における文化地理学的研究の動向を展望²⁰⁾、地理学においては、研究者の共通的理解としての「文化」が必ずしも定立されていないことを指摘した。そして、著者自身としては、価値観を中核とした人間行為の規範や、社会の共通意識としての象徴的事象に限定する文化の見方が、文化地理学において確立されるべきことを主張している。しかし、千葉はそうした言わば非実体的な文化概念の文化地理学の体系における位置づけを必ずしも明確にはしていない。千葉は、「文化という研究対象」、「文化を取扱う地理的方法」について語っており、ここにおいては文化はやはり対象として扱われることになる。この論文自体、必ずしもこうした問題を明示的に扱おうとするものではないが、一般的な文化地理学の対象たる経験的実在的文化との関係が明らかにされぬまま、狭義の「文化」概念が提示されるのである。

以上のように、日本の文化地理学においては、文化の概念の考察にあたって、十分な展望を踏まえた議論は少なく、その問題点が十分煮詰められてきたとは言いがたい。また、アメリカにおいてと同様、文化地理学の対象として

の文化を考える傾向が強く、そこから必然的に、経験的に実在する抱括的生活様式として文化をとらえる立場が主流を占めてきたと言えよう。

さて、文化地理学におけるこうした状況は、70年代の後半から80年代にかけて多少の変化を見せ始めてきたように思われる。『文化地理学論集』において斯学の方向性を示したワグナーやマイケル自身、問題の再考の必要性を認め始めた²¹⁾ことは、アメリカの文化地理学者の考え方に変化が出てきたことを示している。こうした変化の背景には、計量的空間分析や地理学の社会科学化、新環境主義のような新しい地理学の多様な動向、そして何よりも人文主義地理学 (humanistic geography) が文化地理学における伝統的な仕事の再評価とそれへの挑戦を含む新しい展開を見せ始めてきている²²⁾ことが底流としてあるように思われる。こうした流れの中で、ダンカン (Duncan, J.S.) は、従来のアメリカの文化地理学における文化概念の実体化と超有機体說的傾向を鋭く批判することになる²³⁾。そこで、次章ではこのダンカン論文を取り上げ、その主張と意味するところについて考えて見よう。

II ダンカンによる文化概念の実体化批判

ダンカンは、1980年に「アメリカの文化地理学における超有機体説」と題する論文を、アメリカ地理学者協会彙報 (A.A.A.G.) に発表²⁴⁾、この中で、アメリカの有力な文化地理学者達が文化の概念に関しては、クローバー、ホワイト等の超有機体的 (superorganic) な概念のみを採用し、他の定義や考え方を無視してきたこと、それによって文化の概念を実体論的なもの (ontological status) として具象化 (reification) してきたこと、等を批判した。以下、このダンカン論文の内容を紹介し、それによって、文化地理学における文化の概念の問題点が、どの程度まで剔抉され、その解決への道が示されたかを検討したい。

ダンカンは、まずアメリカの文化人類学における超有機体説の主唱者として、クローバーとホワイトを取り上げる。クローバーは、1917年に「超有機体 (The Superorganic)」と題する論文で、文化の自律性、それが生物 (有機

体)や個人のレベルを越えた独自のレベルをもつことを強調、これがアメリカの文化人類学における文化決定論 (cultural determinism) の始まりとなった。彼の図式においては、個人は社会の替在的なベースではあるがその原因となるものではなく、むしろ人が行動する原因となるのは社会——文化的レベルである、とする。ホワイトもまた、文化の超有機体的な性質を強調し、1度文化が発達すると超肉体的 (extra-somatic) になり、その新しい発展の法則に従うと主張する。ダンカンによれば、こうした考え方はヘーゲル (Hegel, G.W.F.) の「精神 (Geist)」, デュルケーム (Durkheim, E.) やパーソンズ (Parsons, T.) の社会学等における、全体論 (holism), すなわち全体が決定的な力をもつと考える超越論的 (transcendental) な強い哲学的主張、の系譜に属するとされる。

続いてダンカンはアメリカの文化地理学における超有機体的傾向を検討している。彼によれば、アメリカの文化地理学者の全てが、クローバーの極端な超有機体説を意識していたわけではないが、彼等の仕事はその議論に実質的に加わっている、という。こうした傾向の形成に最も力があつたのは、パークレイにおいてクローバーやローウィ (Lowie, R.H.) と密接な結びつきをもったサウアーで、彼の影響の下に多くの文化地理学者達が育つた。彼等の多くは、文化概念の定義に際しては、クローバーやホワイトを引用し、傾向が異なる他の理論には触れていない。特に、ゼリンスキーは、はっきりとした超有機体説支持の立場に立っており、文化が本質において超有機体的であり超個人的 (supraindividual) である、と説明している。

このような文化の超有機体説の前提は何であろうか。ダンカンによれば、次の4つほどのテーゼが、その理論を構成する重要な仮定となっているという。まず、文化は個人の外側にあるものとして仮定される。文化は、文化的及び社会的事実から成る超有機体的なものとして、生物 (biology) の領域とは区別される。文化は個人なしには存在し得ず、その作動のために個人を必要とするが、全体としては個人を離れ、個人を越えた存在である。ここにおいては、個人は efficient cause として単なるエージェント (agent) であり、文化は formal cause として実体化される。ダンカンによれば、これは1つ

の出来事の formal cause と efficient cause の間のアリストテレス的区別であるとされる。そして、このような仮定に対しては従来より多くの批判があるばかりでなく、クローバーやホワイト自身の一連の経験的研究によってもその理論を実質化することに失敗しているという。

次に、文化の内面化 (internalization) の前提がある。すなわち、超有機体説のルールの下では、典型的な価値や規範が、ある先験的 (transcendental) な対象が個人によって内面化される場所のメカニズムとして仮定されている。これらの価値は、「文化のパターン」という考えにつながり、多くの地理学者がこの「パターン化」の仮定を採用してきた。ダンカン²⁵⁾は、文化地理学者によるパターン化の典型として、ゼリンスキーの議論を取り上げる。ゼリンスキーは、前述の『合衆国の文化地理』において、4つのテーマないしモチーフをアメリカ文化の基本的性格、エートスとして取り上げた²⁵⁾；1)強い、ほとんどアナキーな個人主義、2)流動性と変化への高い評価、3)機械的な世界観、4)メシアン的完全主義。ダンカンによれば、このようなイデアル・タイプは、モデルないし発見的方法としては説明において使用されてよいが、ゼリンスキーのように因果的な説明において、先験的、自律的なものとして使用することは、明らかな誤用である。

3番目に、均質性の仮定がある。文化地理学者の仕事のほとんどは、1つの文化の中における均質性を仮定している。そのため、しばしば比較的プリシティブな村落地域の調査が、より大きな均質性の識別のために選ばれる。2、3の文化地理学者は、アメリカ合衆国のような複合社会を研究する時にも、均質性を仮定する。ダンカンによればこうした均質性の仮定は、文化がアクティブな力であり、個人が受動的な受け手として定義される時為される。従って、均質性の仮定への攻撃は、文化の超有機体説の核心をつくことになる。

文化の超有機体概念と関連する最後の主要仮説は、文化的価値の内面化のメカニズムとしての習慣化 (habituation)、条件化 (conditioning) の仮定である。人類学者が採用してきたこの仮説を、文化地理学者も無批判に受け入れ、外的な力によって条件づけられる人間像を描き上げてきた。ゼリンスキ

ーは、「アメリカ人は、唯一の適切かつ自然な行動のモードとして個人主義を受け入れるように条件化されている」と述べる²⁶⁾。しかし、全ての住民にとって均質な習慣的行動パターンがあるという仮定は支持し難い。ダンカンによれば、人間行動には個人の選択と創造性というもう1つの側面があり、選択に対する強制や条件は、自律的なものではなく、個人とグループの活動に分析可能である、という。

さて、それではどのような解決の方向をダンカンは指し示しているのだろうか。彼によれば、文化と名づけられてきたものは、人々の間の相互作用(interaction)に環元できるという。個人は、他人との相互作用の中で、彼自身の性質を形成する。個人はこのコンテキストの産物であるとともに、その創造者であり維持者でもある。文化という語は、それ自身説明の変数としてではなく、行動のためのコンテキスト、または様々なレベルの集合の人々の間の一連の配列、を意味するために使用されるなら、救われ得るであろうと結論している。

以上、ダンカン論文の要点を整理してきたが、このような見解でもって、文化地理学における文化の概念の問題点は、どの程度まで明らかにされたであろうか。また、彼の結論によって、十分かつ適切な文化の概念は示され得たのであろうか。文化地理学においては他分野で展開された文化への一般的アプローチを批判せずに取り入れ、この概念に関する論争に主体的に関わってこなかった、というダンカンの批判は、本稿でもその一端を見てきたように多分に真実であろう。そして、一部の文化地理学者の仕事の中に、文化の実体化(reification)傾向の行き過ぎが見られたことも、おそらく言えるであろう。しかし、ダンカン論文の言うところを、ここで全面的に貢定してしまうわけにはいかない。

まず、ダンカンの論議の中で、最も不十分と思えるのは、彼が説明のレベルと実在のレベルとを混同しているように見えることである。文化という概念による説明は、必ずしも文化が自律性をもった実体的な存在であることを意味しない。ダンカンが批判したクローバーの文化概念においても、定義の曖昧さはあるものの、彼が文化的レベルとして主張したものは、説明ある

いは法則の適応におけるある程度自律的なレベルであって、そのレベルにおいて実在するユニークな実体そのものを指しているわけではない²⁷⁾。ダンカンは、超有機体的全体としての文化のレベルを拒否することによって、説明のレベルとしての文化の有効性をも否定してしまっているように見える。しかし、文化地理学という分野を確立しようとする限り、他の説明の様式との正しい関係を踏まえた、文化による説明は追求されねばならない。

このことは、ダンカンが、文化の概念が人々の中の相互作用に還元され得る、としていることにも関係する。こうした考え方は、リチャードソン (Richardson, M.) が批判している²⁸⁾ ように、明らかに還元主義 (reductionism) であり、文化の実体化 (reification) と同様、特定な概念の偏重と言わざるを得ない。もし、真に社会における全ての現象が、人々の相互作用に還元し得るなら、そしてそれらの相互作用が完全に自律的なレベルで動いているなら、文化による説明はいらないことになる。しかし、ダンカンは引き続いて、社会には様々なスケールの一連の脈絡 (コンテキスト) があり、文化は社会的相互作用のためのコンテキストであるとも述べる。ここにおいて、社会的相互作用そのものも、自律的なレベルではなく、ある脈絡 (コンテキスト) の下で行われていることになる。この脈絡、あるいはその背後にある“文法”を、文化と呼び得ることは、ダンカン自身も認めている。ダンカンの論理は、ここにおいて自ら単純な還元主義を否定し、自己撞着に陥っているのである。

以上のごとく、ダンカン論文は、文化地理学における文化の概念の構築に、十分な方向性を与えるものとは言いがたい。しかし、この論文の出現が意味するところは決して小さくない。すなわち、この論文において、ようやく文化地理学者自らが、明示的に文化の概念を問題にし、自らの立場で議論し始めたのである。それは、文化地理学における説明の問題に、文化地理学者達が直面せざるを得なくなることをも示唆する。その意味においては、この論文が多分に polemical な調子で書かれたことは、むしろ幸いであったと言うべきであろう。ダンカン論文は、議論の帰結ではなく、その始まりを意味するのである。

III 説明の様式としての文化へ — 結びにかえて —

では、文化地理学において、あるべき文化の概念とは、どのようなものなのであろうか。どのような文化概念を、文化地理学の基本的枠組として我々は考えて行けばよいのであろうか。もとより、このような大きな問題に、十分に対処するだけの準備は、筆者にはない。しかしながら、ここまで論を進めた責任上、現状における若干の見通しのみは述べておかねばなるまい。

まず、最初の前提として考えておきたいことは、文化は文化地理学の対象ではない、ということである。文化を文化地理学の対象と考える限り、実在する生活様式ないし文明と文化との概念的区別は曖昧になり、また表層的抱括主義的な文化概念、言わばタイラー的概念、から脱け出すことはできない。もとより、文化地理学とは何か、という問題について明確な一致はないが、我々はここで文化地理学の対象と説明の様式を切り離すことから出発したい。すなわち、文化地理学の対象は空間的次元をもって実在する生活様式あるいは人間の行動であり、文化はそれにアプローチする観点、あるいは説明の様式なのである。

このように考える時、文化地理学における文化の概念は、まず説明の様式として、現象に対する有効かつ正しい説明力を持たねばならないことになる。タイラー的な抱括的文化概念が、何ら説明力を持たないことは言うまでもない。何となれば、そこにおいては説明されるべき対象とそれを裏打ちする規範、言わば実体と抽象、とが並列的に抱括されているからである²⁹⁾。ここにおいて、文化はまず実在するもの、具体的なものに対応し、それを説明する、抽象的非実体的な価値体系や規範を中核としてとらえられなければならない。しかし、文化を単に抽象的な価値と信念の集合体と規定するだけでは不十分であろう。価値や信念は、具象的なものと結びつき人の行動に現われてこそ、文化地理学において意味をもつ。文化は、一定の価値体系を社会的に共通して受け入れ、実体的な行動とその結果において発現・発揮する一連の構造、メカニズムとしてとらえられなければならない。文化そのものは経験的実在

ではないが、常に実在するものと結びついた動的な体系を備えたものなのである。このように考えてこそ、文化伝播や文化変容のような文化的プロセスのより正確な概念的位置づけも可能になるものと思われる³⁰⁾。

では、いかにして、社会化された価値体系が生じ、維持されるのか。個人の主体性は、いかにして他者の認めるところとなり、自他共有の価値となり得るのか。すでに批判済みの条件化の理論で、この問いに答えるわけにはいかない。文化概念の中核を為すこの問題に、正確な解答を与えることは現状では難しいことのように思われるが、リチャードソンがダンカン論文へのコメント³¹⁾の中で展開した、間主観的 (intersubjective) なものとしての文化の見解は、明らかにこの問題に一定の照射をあてている。すなわち、ここでは人間はシンボルを介してコミュニケーションし、相互に作用し、感情、考察を共有できるが故に、互いの主観性へのアクセスが許される存在としてとらえられる。主観的な価値や主体性は、シンボル化を通して自己と他人とが共通してもつ社会的な一連のパターンに置換される。こうした文化の社会的で間主観的な性質を考えることによって、文化概念における個人と社会の正しい関係の考察、個別論 (individualism) と全体論 (holism) との統合が可能になるように思われる。ここにおいて、文化地理学における文化の概念の構築は、人文主義的・現象学的方法と結びついていくことになる³²⁾。

しかし、主観の側にある価値体系が、一定の行動様式、生活様式のパターンとして外在化される構造は、以上の考察でもって必ずしも明らかにされない。この問題への十分な解答も現状では難しいが、価値体系から生活様式へと発現する構造に、いわゆる記号論的な場の存在を仮定することも、1つの方向であろう。状況を非常に単純化した場合、生活(行動)様式を規定してくる一連の価値体系は、記号論的体系におけるコードに例えられる。しかし、生活様式がメッセージであり、価値体系がコードである、と単純に言うてしまうことは、やはり少しく性急であろう。なぜなら、文化の全体系は、単に1つの記号体系に比するにはあまりにも豊富な内容を持ち、その働きと具体的現われは常に時とともに変化し、また一定の幅で個人の主体性をも許容し得るものだからである。言わば、強制力において多様であり、また様々な内

容と形式をもつ一連のコード群を内在しているところの、より緩かな、流動する体系が文化であるということができよう。その意味では、文化はむしろ言語（ラング）に例えられる存在とすることができる³³⁾。安易な言語学の概念とのアナロジー、あるいはその拡大は避けるべきであろうが、文化概念の中核に、ラング的な構造を見る、いわゆる構造主義的考え方は、文化地理学における文化概念の考察においても1つの有力な考え方となろう。ここにおいて、文化は、実在的な「表層の構造」である生活様式ないし文明を深層から規定してくる構造（「深層構造」）を中核として、理解されることになる。そして、深層から表層への転換、すなわち、規範、価値体系から生活様式または行動パターンへの置換も、記号論的な場とのアナロジーにおいて、解釈されることになる。しかしながら、文化の深層に普遍性を求める構造主義的あるいは記号論的世界は、個人の主観、主体性が埋没した世界であり、個人の主体性から出発して、間主観的な文化の実在 (reality) を考えるリチャードソンの立場とはかなり懸け離れている³⁴⁾。生き生きとした個人の主体性を、記号論的な場において解釈される文化の中で、どのように位置づけ、どのようにその役割を評価していくかは、今後の大きな課題になるものと思われる。

以上、現象に対して説明力をもつ文化の概念を追求してきたが、文化による説明が他の様々な説明の可能性を拒否し排除するものであってはならない。文化による説明は、文化決定論を意味するものではなく、他の様式の説明、すなわち経済的、社会的な説明等と共存し得るものである。しかしながら、これらの説明様式と文化による説明の様式とは、並列的に分節化されたものではあり得ない。経済的説明や社会的説明は、言わば経験的に実在する現象間の関係から構築し得るもの、すなわち記号論的立場から言えば、表層構造の中における説明の様式であり、それに対して、文化の説明の様式は、実体的な生活や行動の様式を、人々がいっている価値体系や規範から説明するもの、言わば深層と表層とを結ぶ説明様式なのである。例えば、文化地理学の対象としてよく取り上げられる家屋の様式 (house type) を考えてみよう。特定の農村家屋様式を構成する機能空間の組み合わせ——例えば、居室、畜舎、作業土間——とそれらの規模は、地域的な農業のシステムや家族構成等の特

色から説明され、言わば経済的、社会的な説明の様式が適用される。しかし、それらが一定の形態、様式において構成され、それが地域の住民によって社会的に受け入れられ、シンボル化されて存在するようになる現象は、文化によって説明されるべきものなのである。特定の家屋様式が地方的に存在するという現象の解明は、本質的にこうした二重の説明様式を必要としており、それらは相互に排斥し合うものではない。文化地理学における文化概念の構築と適用は、他の様式による説明との正しい関係を指示し、確立していくものでなければならない。

以上、文化地理学における対象としての文化概念から、説明の様式としての文化概念への転換を求め、現象として実在する生活様式ないし文明の様式を説明し得る文化の概念の可能性を検討した。しかし、小論で述べ得たことは、いずれも素描あるいは論点の提示に留まるものであり、十分な展望を踏まえての本格的な議論には至らなかった。また、あるべき文化の概念を踏まえての文化地理学の方法論体系の構築は、なお今後の大きな課題として残る。これら残された諸問題に関しては、さらに機会を得て論じていくことにしたい。

注

- 1) Sauer, Carl O.: Cultural Geography, Encyclopaedia of the Social Science VI, Macmillan, New York, 1931, 621—23 (Wagner and Mikesell, 1962 —注3参照—に再録, p.30—34).
- 2) 例えば、プラットの「アメリカにおける文化地理学の発達」を論じた論文にも、こうした傾向が強く出ている。Platt, Robert S.: The Rise of Cultural Geography in America, Proceedings of the Seventeenth International Geographical Congress, Washington D.C., 1952 (Wagner and Mikesell, 1962, に再録, p.35—43).
- 3) Wagner, Philip L. and Marvin W. Mikesell (ed.): Readings in Cultural Geography, Univ. of Chicago Press, Chicago, 1962, 589ps.
- 4) 前掲3, p.1—24.
- 5) 近年の人類学における文化の定義は、実体的な事物や行動をあまり強調せず、その背後にある抽象的な価値と信念を強調する傾向にある。 Haviland, William A.: Cultural Anthropology (2nd ed.), Holt, Rinehart and

- Winston, New York 他, 1978, 471ps. (p.12).
- 6) 60年代においては、例えばクリツナーの論文における文化概念の考察等も、全く同様の傾向と弱点を有している。Critzner, Charles F.: The Scope of Cultural Geography, The Journ. of Geography, 65(1), 1966, 4-11.
 - 7) Zelinsky, Wilbur: The Cultural Geography of the United States, Prentice-Hall, Englewood Cliffs, N.J., 1973 164ps.
 - 8) 前掲7, p.68-77.
 - 9) 前掲5, 参照.
 - 10) Spencer, Joseph E. and William L. Thomas: Introducing Cultural Geography (2nd ed.), Wiley & Sons, New York 他, 1978, 428ps.
 - 11) Jordan, Terry G. and Lester Rowntree: The Human Mosaic: A Thematic Introduction to Cultural Geography (2nd ed.), Harper & Row, 1979, 482ps.
 - 12) 西亀正夫: 文化地理学の諸問題, 古今書院, 東京, 1934, 208頁.
 - 13) 辻村太郎: 文化地理学, 岩波書店, 東京, 1942, 182頁.
 - 14) 木内信蔵(編): 文化地理学, 朝倉地理学講座8, 朝倉書店, 東京, 1970, 248頁.
 - 15) 木内信蔵: 文化地理学の対象と方法(前掲14, p.1-11).
 - 16) 千葉徳爾: 日本における文化地理学的研究の動向——とくに人類の象徴的行為としての文化を空間的視角から研究する試みについて——, 駿台史学50, 1980, 268-285.
 - 17) 別枝篤彦: 文化地理学の諸問題, 地理12(2), 1967, 7-12.
 - 18) 佐々木高明: 文化地理学と境界領域研究——1つの素描的考察——, 地理17(1), 1972, 63-70.
 - 19) 佐藤甚次郎: 生活文化と土地柄——生活地理学序説——, 大明堂, 東京, 1976, 287頁.
 - 20) 前掲16.
 - 21) ワグナーは、より大きい研究の道具とするために、文化のアイデアの再考を必要とすると述べた。またマイクセルは、多くの地理学者が文化の意味に関しては、それに関する合意が人類学者によってすでに為されたという誤った信念のため、放任主義の態度をとってきたことを指摘し、地理学者はいかに文化の概念を使用することを望むかという問題に、より真剣な思考を向けるべきことを求めている。Wagner, Philip L.: The Themes of Cultural Geography Rethought, Yearbook of the Association of Pacific Coast Geographers 37, 1975, 7-14. Mikesell, Marvin W.: Tradition and Innovation in Cultural Geography, Annals of the Assoc. of American Geographers (A.A.A.G.) 68, 1978, 1-16.

- 22) Ley, David: Cultural / Humanistic Geography, Progress in Human Geography 5, 1981, 249—257.
- 23) Duncan, James S.: The Superorganic in American Cultural Geography, A. A. A. G. 70, 1980, 181-198.
- 24) 前掲23.
- 25) 前掲7 (特に, p.36—64).
- 26) 前掲7, p.42.
- 27) この点に関して、クローバーはかなり注意深く論を進めているように思われる。例えば、1948年に提出された「科学における文化の概念」の中では、一般概念としての文化 (culture) は、社会、心理、身体等と同様、抽象的であるとす。また、身体的、心理的、社会的、文化的というレベルの認識は、それぞれのレベルにおいてユニークな実質 (substance) が現実であると想定することを意味しないとし、それぞれは経験的に見出された自然の全領域 (the total field of nature) の分割 (segmentation) を代表し、それぞれにおいて異なる知的手続きが最も有効なように見える、と述べている。Kroeber, Alfred L.: The Concept of Culture in Science, in The Nature of Culture, Univ. of Chicago Press, Chicago, 1952, 118—135 (Symposium: The Landmarks of Scientific Integration, 1948, に提出)。
- 28) Richardson, Miles: On "The Superorganic in American Cultural Geography, A. A. A. G. 71, 1981, 284—287.
- 29) ハヴィランド (前掲5), p.12 参照。
- 30) 石田は、ラドクリフ＝ブラウン (Radcliffe-Brown; A. R.) の言葉と関連して「文化が実体のない抽象にすぎないとすれば、……文化の伝播、文化の接触、文化の変容、等々を語ること自体、意味をなさないというほうが、むしろ首尾一貫しているかもしれない」と述べているが、これには必ずしも同意し難い。文化の伝播、接触、変容といった過程は、確かに具体的には実体的な生活様式の変化として現われる。しかし、それを可能にするものは、シンボル化を通じて伝達される抽象的価値体系の変化であり、むしろ文化概念の抽象性あるいは抽象的な部分をはっきり認識してこそ、これらのプロセスの意味を、はっきり語り得るというべきであろう。石田英一郎：文化人類学入門、講談社、東京、1976、323頁 (p.60 参照)。
- 31) 前掲28.
- 32) レイ (Ley, D.) も、文化地理学の拡張としての人文主義地理学の意義を語っている。前掲22.
- 33) コードとラングとの関係、異同については様々な見解があるが、ムーナンは両者の違いについてのギロー (Guiraud, P.) の考えを次のようにまとめている；コードは明白で、あらかじめ定められた、強制的な規制をもった、閉鎖的

な動きのない体系であるのに対し、言語（ラング）は暗々裡で、あらかじめ定められていず、非強制的な規則をもった、開放的な、常に進化する体系なのである。Mounin, Georges: Introduction à la sémiologie, Les Editions de Minuit, 1970 (福井芳男・伊藤 晃・丸山圭三郎訳：記号学入門, 大修館, 東京, 1973, 320頁, p.102-103).

- 34) 櫛谷も、実証科学を目指す構造主義的方法と、反実証主義に始まる人文主義的地理学とが、本質的に相容れないものであることを指摘している。櫛谷圭司：空間の「意味」の構造と構造主義の方法, 人文地理36, 1984, 266-277.

(筆者 岩手大学人文社会科学部助教授)